

佳作

強く生きる

三重県桑名市立陵成中学校二年 佐藤 晴輝

「法事とは、定期的に故人をしのぶものだけでなく、各々が故人との関わりを振り返り、前向きに生きる決意をする場でもある。」

先日、母の七回忌が行われ、中休み時に御住職さんから頂いた言葉が、中学二年の春に起きた出来事の心の支えとなったのである。

母は僕が幼稚園の時に大病を患い、小学一年の冬に息を引き取ったが、実はこの御住職さんも、若くして先代である父を亡くし、当時は手のつけられなかった不良の彼を、いやおうなしに跡継ぎへと導いた。そのため、現在の容姿も俗に言う丸坊主ではなく、ゆるふわパーマに無精ひげといった、お世辞にも褒められるものではない……。見た目からは想像もつかない一言が心に響くといった事が、七年前からたびたび見て取れた。

を保つ事ができた。からかったメンバーに事情を説明すると、すぐに受け入れてもらい、今度は僕を守ってくれる存在に変わっていく姿が、とても印象的で素晴らしい瞬間だったのを、強く感じる事となったのである。

母親というかけがえのない存在を亡くし、何かと不便な時期もあったが、今の日常が当たり前として受け止める様になる中で、自分に携わる人達への感謝は、日に日に強くなるばかりだ。これから大人になる上で生き方は多様化し、社会情勢もすごいスピードで変化し続けるだろう。どんな時も自分の経験を大切にし、相手に寄り添う事ができれば、明るい未来が待っているに違いない。今、改めて伝えたいのは、
「お母さん、これからも強く生きていくよ。」

その一つ目として、故人に対し仏教における「戒名」が与えられるそうだが、事前に何のお願ひもないうちで、僕の名前の一文字である「輝」を入れて頂いたこと。これには父や祖父も有難いと喜び、天国でもずっと見守ってくれているものだと思いつける事ができた。なぜなら、小学生の頃はどうしても周囲の目が気になり、片親である事に劣等感を抱いていたため、強く生きるためのバイブルを手元に持つておく必要があったからである。

それから、三回忌の際は「家族・友人・周囲の人々を敬いなさい。いつか自分に返ってくる時がくるはず」という言葉を、誰もいない本堂でそっと聞かされた。僕の目をまっすぐに力強く見つめる姿がとても印象的だったのを覚えている。

いつも前向きに生きてきたつもりだが、今年の春に、初めて同級生から母がいない事を馬鹿にされた。小学校が違うメンバー達の行き過ぎた悪ふざけだった。悲しい気持ちになったが、助けてくれたのは同じ小学校の同級生二・三人。彼らは小さい頃から母の事を知っているため、いつも気遣ってくれていた。そんな友人達を誇らしく思っていたし、御住職さんからの言葉を思い出すと、感情的にはならず、冷静